

国公立大学前期試験が25日(火)から始まった。思い返せば、今年度の3年生は昨年元日の地震以降、遅々として復旧が進まない14ヶ月間、前向きに学校生活を送ってきた。心の荒む光景を目の当たりにし続け、不自由な生活をずっと強いられてきたはずなのに学校を荒立てることもなく、かえって明るく元気に過ごしている。頭が下がる思いである。発災時は2年生だったので、もしかしたら1年先に行く先輩達を他人事のように見ていたのかも知れないが、それにしてもこの1年で大きな精神的成長を遂げている。その証左に、9月から始まった就職試験や推薦入試では、難関と言われていた企業にチャレンジした者をはじめ民間就職はみな初回の受験で内定を得るなど素晴らしい成果を挙げている。

アメリカの教育経済学者のヘックマンが学力(認知能力)を向上させるためには非認知能力が重要であると言っている。学校のテストや入試では試験をすることでその人の学力を点数で評価(認知)する一方、ヘックマンのいう非認知能力はやる気・忍耐力・協調性・自制心など、人の心や社会性に関係する力で、試験で○×を付けて明確に点数等で評価できない力を指す。これは氷を水に浮かべた時の様子がイメージとしてぴったりである。水面下の氷が非認知能力で、空気中に出ている部分が認知能力である。水面下の氷を「努力」、空気中の氷を「成果」と置き換えても良い。我が石川の偉大なるスター松井秀喜氏のお父さんが彼の小学時に送った名言である「努力できることが才能である」と重なる。努力を継続するにはやはりやる気、忍耐力、協調性、自制心が必須項目であり、その哲学を持って松井氏を育て上げたお父さんもまた尊敬に値する方である。

この非認知能力は幼児期までに形成されてしまうと言われている。従って、民間教育関連会社はこぞってこれをアピールし、幼児教育への介入による収益増加を図っているのだが、本校の場合、進路結果と相まって3年生の人間的な成長が特に顕著に見えるだけであって、1、2年生も同様に成長し模試等の成績も向上していることやこれまでの卒業生の成長から、飯高生は多くの方が思春期であっても非認知能力を高めているといえる。それは珠州市や能登町の幼児教育において水中の氷の最深下部分にヒドゥンカリキュラム的な、もしかしたら当地の人でも認識していない教育が施されているのかも知れない。私が思い当たるとすれば、「素直さ」である。

さてさて、話を今頑張っている一般入試受験生に戻すと、12月からの特編以降、真摯にそして直向きに努力する様子が机に向かう後ろ姿からヒシヒシと伝わってくるようになった。いわゆるオーラが出ているというか、後光が差しているのはまたひと味違った受験生ならではの気迫が感じられた。出願校決定後2月に入ってから、面接練習を何人かの人に行なったが、その受け答えからも様々なことが見て取れる。面接練習は一生懸命さはもちろん生徒の成長が直に伝わってくるので、大変楽しみにしている活動である。何度か行なっていくうちに短期間でグイグイと成長する者もいる。況んや認知能力をやである。受験生の努力が報われることを願ってやまない。

受験でその人の一生が決まってしまうわけではないが、受験はその人の人生の縮図である。その人の考え方や振る舞いが受験結果に影響を与える。この難関を乗り越えるための武器が認知能力で、どう乗り越えていくかの戦い方が非認知能力とも言え、その総合力が結果として出る。そういった意味で、3年生においては仕事や学業の他に多くの社会活動に、1、2年生には学習に加えてゆめかなプロジェクトや部活動、ボランティアなど様々な活動に一生懸命に取り組んでくれることを期待する。